

政策審議会コメント
特別委員 鈴木 博晶

’17. 2. 1

種苗養殖における種の弱体化の研究が必要か

自然界であれば、体質が弱く稚魚稚貝の段階で死んでしまう個体が、種苗養殖によって成長ができることに危うさを感じています。

感覚的な評価で科学的ではないと思われるのですが、相模湾のヒラメのことを例示します。相模湾ではかなり以前からヒラメの種苗放流が成されてきた成果として、小田原沖などでヒラメが安定的に漁獲できています。

しかし、天然生まれ天然育ちのヒラメと種苗放流天然育ちのヒラメでは、その肉質や外観が異なると漁師達は言います。

私自身も特に肉質については、顕著であると感じています。

純天然は、サクにして刺身として食しても3日ほどしっかりした食感が保ちますが、種苗育ちと思われるものは、2日目には身の締まりがなくなってしまいます。

要するに、自然淘汰によって強い個体だけが生き残り成魚になっていたのに、自然界で本来は成魚になれない弱い個体も繁殖してしまうことで、種全体の力が弱っていくことが懸念されるのです。

種苗養殖について、そのような観点で、種の健全な保全についての研究例はほとんどないようです。長期的な漁業資源の安定化を目指す上で、種苗養殖における種の健全性の維持という研究課題をどこかに位置づけていただけませんか。